

月報 シオン山

2026年2月1日発行 (No 504)

日本バプテストシオン山教会

〒803-0846 北九州市小倉北区下到津2-15-21

Tel (093) 561-0772 Fax (093) 561-0760 E-mail:bapshion@eagle.ocn.ne.jp

【月間聖句】

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。

(マタイによる福音書7章7節)

— 罪をあがなってくださる主を見上げて —

田中 秀一

私は、ふとした折に自分の言葉や態度を思い返し、胸の奥がちくりと痛むことがあります。忙しさの中で、相手の話を十分に聞けなかつたこと。正しいことを伝えようとしながら、思いやりを欠いた言い方になってしまったこと。教師として、また一人の信仰者として歩んできた中で、年を重ねるほどに、自分の弱さや罪深さが、よりはっきりと見えてくるように感じます。

そんなとき、私の心を支えてくれるのが、ルカによる福音書23章40～43節の御言葉です。十字架につけられた二人の犯罪人のうち、一人は自分の罪を認め、「あなたが御国に入られるとき、私を思い出してください」とイエスに願いました。イエスはその願いに対して、「あなたは今日、私と一緒に楽園にいる」と答えられました。

この犯罪人の人生は、決して立派なものではなかったはずです。も

し私たちが、その罪人の人生を点数で評価するとなったら、良い点よりも圧倒的に悪い点のほうが多い多かったと思います。しかし主は、その人の人生を「どれだけ悪いことをしたか」で裁かれたのではありませんでした。

最後に神に向けられた、小さな悔い改めの心、わずか1%にも満たないかもしない善の思いを、主は見逃されませんでした。99%が罪に見える人生であっても、その1%に光を当て、赦しを与えたのです。

私はこの罪人の姿に、自分自身を重ねてしまいます。いくら自省しながら人生の道のりを歩んでも、失敗や後悔が消えることはありません。けれども、主はそのすべてをご存じのうえで、「それでもあなたを赦す」と語ってくださる。その事実が、私をもう一度立ち上がらさせてくれます。

さらに心を打たれるのは、イエスが十字架の上で、ご自分を十字架につけたローマ兵たちのためにも祈られたことです。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」。理不尽な暴力と嘲りのただ中で、イエスは裁きの言葉ではなく、赦しの祈りを選ばれました。私たちは日常の中で、少し傷つけられただけでも心を閉ざしてしまいます。その私たちの姿と、主の姿とのあまりの違いに、ただ頭を垂れるほかありません。

正直に言いますと、教会生活の中においても、私たちは人ととの関わりの中で、思いがすれ違ったり、気持ちがうまく伝わらなかったりすることがあります。意図しないうちに誰かを傷つけてしまったと感じることもあれば、また逆に、自分が傷ついたように思うこともあるかもしれません。そのような時こそ、私たちは立ち止まり、もう一度十字架の前に心を向けてみたいと思います。そこには、私たちの弱さや罪をすでに引き受け、赦しの道を備えてくださった主が、今も静かに立っておられます。

二月を迎え、寒さの中にもモクレンの蕾のふくらみに、少しずつ春の兆しが感じられるようになりました。どうかシオン山教会に集うお一人おひとりが、自分を責めすぎることなく、また他者を裁きすぎることなく、十字架の主を見上げて歩むことができますように。罪をあがなってくださる主の愛が、私たちの心に静かな平安として満ち、教会全体を包み込んでくださることを、心から祈っています。

